

イスラームの生命倫理における 初期胚の問題

—— ユダヤ教、キリスト教と比較して ——

青 柳 か お る

序論

現代社会においては、前近代の医学では想定されていなかった問題が生じている。とくに20世紀以降の医療技術の発展の結果、生命への高度な人為的介入が可能になり、1970年代以降、生命をどこまで人為的に操作してよいかという生命倫理の問題が生じてきた。生命倫理は、社会的に大きな要請のある極めて重要な分野であるとともに、イスラーム思想研究において未開拓の分野でもある¹。

しかし、そもそもイスラーム（イスラーム教）には生命倫理という学問分野はなく、手術等は行わず護符や薬草を用いる「預言者の医学 (al-ṭibb al-nabawī)」と呼ばれる伝統的な医療がイスラーム教徒（ムスリム）の支えになっているという見解もある。「生命倫理」なるものは西洋キリスト教文化の一部であり、預言者ムハンマドの時代は言うに及ばず、西洋キリスト教諸国による植民地化以前には、イスラームが内発的に「生命倫理」のような学問分野を発案することはなかった（中田2005, 150）。また貧困、不正、圧政に喘ぐ第三世界において、「生命倫理」が問題となるのは一握りの欧化エリートに過ぎない。絶対多数を占めるイスラーム教徒一般民衆にはこれからも、伝統的なイスラームの教えこそが、生きる意味と指針と慰めを提供し続けていくであろう（中田2005, 178）。

以上のような高度な医療を忌避し、神に生死を任せるというイスラーム教徒の伝統的な見解についても検討しなければならないが、イスラームの古典文献には、現代の生命倫理に直結する議論の蓄積があることは確かである。また第

¹ イスラームの生命倫理に関する文献については、本稿末の参考文献リストを参照。

三世界に住むイスラーム教徒にとって、焦眉の問題は、十分な栄養、清潔な飲料水、最低限の医療品の確保である（中田2005, 153）としても、人口爆発が進む中で、家族計画といった生命倫理が切実な問題になっていることも確かである（飯塚 2003）。医療・医学の発展した地域に住むムスリムにとってはなおさら、臓器移植や再生医療への関心は高いと言えよう²。

筆者は、従来から行ってきたイスラームの女性およびセクシュアリティ研究（青柳 2003; 青柳 2005; 青柳 2008; Aoyagi 2005）を生命倫理研究へと発展させ、女性と関わりの深い出産をめぐる諸問題を主に分析してきた（青柳2011）。具体的には、古典時代と現代における避妊や中絶における生命倫理について比較検討してきたが³、これらの問題は初期胚や胎児の形成過程の問題と密接に結びついており、再生医療のES細胞（胚性幹細胞、受精卵から作られる未分化の幹細胞 Embryonic Stem Cell）やクローンの問題へ発展させることが課題となった。

再生医療にはクローン、ES細胞、iPS細胞（人工多能性幹細胞 induced Pluripotent Stem Cell）などの方法が用いられるが、クローンを作ることは神の創造行為とも重なるし、またES細胞は、受精卵はいつから人間になるのかという問題を含んでおり、大変興味深いテーマだと思われる。また再生医療の技術は近年発展してきたものであるため、イスラームの再生医療に関する研究はまだほとんどないのが現状である。

本稿では、ES細胞という再生医療における初期胚の破壊の問題を取り上げ、クローンについては今後の課題としたい。ES細胞の議論について、主にアメリカ政府の生命倫理諮問委員会（NBAC: National Bioethics Advisory Commission）刊行の報告書『胚性幹細胞研究の倫理問題（*Ethical Issues in Human Stem Cell Research*）』第3集「宗教的視座」（2000年）（<http://bioethics.georgetown.edu/nbac/stemcell3.pdf> 2011年11月26日アクセス）を分析し、ユダヤ教、キリスト教とも比較しながらイスラームの初期胚に関する生命倫理の議論を三大一神教の中に

² イランでは再生医療研究や臓器移植が盛んであり、再生医療の研究所ではアメリカの経済制裁を乗り越えて、ドバイを経由してさまざまな器具や試薬を輸入して研究が続けられているという（西川2008）。

³ 現代イスラーム世界の代表的な法学者であるユースフ・カラダーウィー Yūsuf al-Qaradāwī (1926年～)の家族計画に関する議論については、青柳 2008; 青柳 2006; 青柳 2010; Aoyagi 2011 参照。

位置づけたい。

第1章 イスラームにおける初期胚の議論

臓器移植のほかに患者を救う方法として、再生医療がある。病気になった臓器に、ES細胞やiPS細胞といった未分化の幹細胞(stem cell)を目的の細胞や組織に培養したものを移植することにより、破壊された臓器を再生する(補う)というものである。たとえば、パーキンソン病治療のためドーパミンを分泌する細胞を作る、脊椎損傷によって神経細胞が破壊された患者に、培養した神経細胞を移植することによって神経組織を再生するといった応用が考えられる。しかし再生医療は、まだ開発中であまり実用化されていない。本章では、まずコーラン、ハディース(預言者ムハンマドの言行録)にみられる胚の形成過程⁴の記述を述べ、次に生命倫理諮問委員会の報告書に見られるイスラームのES細胞に関する議論をまとめたい。

コーラン23章12-14節には、人間の形成過程について、以下のように述べられている。「われらは土の精髓から人間を造った。ついで、それを一滴として堅固な宿所に置き、その一滴から凝血を造り、そして凝血から肉塊を造り、肉塊から骨を造った。それから骨に肉を着せ、こうして彼を一個の他の生き物として造りだした。」この章句によれば、人間は1.土の精髓、2.その一滴、3.凝血、4.肉塊、5.骨、6.肉、7.一個の生き物という七つの段階を経て、段階的に形成されていく。

さらにコーランには、以下のように精子から成長した肉塊が魂を吹き込まれ、人間になると述べられている。「人間の子孫を卑しい水の精から造りたまひ、形をお与えになり、その中に生命を吹き込みたまうたお方(コーラン31章8-9節)」。

⁴ 胚発生物の発生の過程は、精子が卵子に侵入すると受精卵ができ、受精卵は細胞分裂を繰り返しながら胚盤胞、胚芽、胎児へと変化する。受精卵は、受精後3～5日で子宮内に到着し、胚盤胞(細胞の塊)になる。子宮に着床した胚盤胞の内部細胞塊が胚芽となり、外部細胞塊が胎盤となる。胚とは、おおまかにいって「受精から出生までの人の生命」とされる。人としての形状が明確になってくる受精後8週目あるいは12週目を胎児(fetus)とし、それ以前に限定する用法もある。現在、とくに問題になるのは、人間の姿が現れる端緒となる受精後14日以前の初期胚の時期の胚の利用である(烏蘭2006, 108)。

「わしは陶土で人間を造る。わしがそれに形を与え、その中にわしの霊を吹き込むとき、おまえたち（天使たち）は跪拝するがよい（コーラン38章71-72節）。」

入魂の時期については、コーランには述べられていないが、ハディースによれば、「あなた方のうち誰でも、最初、母の胎内で、40日間で組織が集められ、それから同様の日数で血の塊となり、それから同様の日数で肉の塊となる。それから天使が遣わされて、それに魂を吹き込む。そして天使は四つの言葉を命じられる。（ムスリム 1987、第3巻、570、「定命の書」）⁵」とあり、最初の40日は精液、40日は凝血、さらに次の40日は小さな肉塊になり、それから天使が彼に息を吹き込むと考えられる。つまり120日目に魂が吹き込まれ、胎児は人間になるのである。この120日（または40日、80日）という日数は、中絶の議論や、受精卵の破壊を伴う医療研究において、イスラーム法学者（ウラマー）が依拠する日数であり、大変重要なものとなる。

次にアブドゥルアズィーズ・サチェディーナ（Abdul Aziz Sachedina, Ph. D. University of Virginia）が生命倫理諮問委員会の報告書に寄稿したレポート⁶における ES 細胞に関する見解を取り上げる。サチェディーナはタンザニア生まれのインド系ムスリムであり、ヴァージニア大学宗教学科教授である⁷。イスラーム法学者（ウラマー）ではなく、シーア派の政治思想研究において著名であり、Sachedina 1980, Sachedina 1988といった著書がある。一方、『生命倫理百科事典』に「イスラームの生命倫理」（Sachedina 2004; サチェディーナ 2007）といった項目を執筆し、また Sachedina 2005を著すなど生命倫理研究も進めている。

⁵ 同様のハディースとして「あなた方のうち誰でも、最初、母の胎内で、40日間で組織が集められ、それから同様の日数で血の塊として、それから同様の日数で肉の塊として留まる。それから神は天使を遣わして、その人間の粗、寿命、幸福になるか、不幸になるか、の四つを定めるように命じられる（ブハーリー 1993-1994、下巻、152、「予め定められること」1(1)）。」

⁶ このレポートの存在については池内恵先生（東京大学先端科学技術研究センター准教授）にご教示いただき、本稿を執筆するきっかけをいただいた。感謝申し上げる。なお、このレポートは、サチェディーナがクリントン政権時（1993年1月～2001年1月）、アメリカ政府の生命倫理諮問委員会が1998年11月から行ってきた ES 細胞研究に関する検討の報告書に寄稿したものであり（Sachedina 2000）、ブッシュ政権時の報告書にも採録されている（Sachedina 2003; Sachedina 2006b）。

⁷ サチェディーナについては、ヴァージニア大学のホームページ（<http://artsandsciences.virginia.edu/religiousstudies/people/aas.html> 2011年11月26日アクセス）を参照。論文も若干掲載されている。

サチェディーナによれば、歴史的に、イスラーム法の胚に関する議論は、胎児の法的道徳的人格の確定と結びついている。ES細胞については、イスラーム法学者の大部分は入魂の時期を根拠に、倫理的に統制されたES細胞研究にはほとんど問題はないとしている。胚から人間への発展について、ハディースによれば、入魂の時期は受精後4ヶ月つまり120日目である。入魂前は植物のようであるが、入魂後は自分の意志で動くことができる。法学者（スンナ派の大部分とシーア派の一部）は妊娠期間を120日より以前と、入魂後の120日より後に区別している。しかし一方、法学者（スンナ派の一部とシーア派の大部分）はそのような区別をつけることには注意を払っている。120日より前でも胎児は生きているのであり、それを根絶することは罪だからである。

発生学の進歩とともに明らかになったのは、命は子宮の中で、妊娠して受精した瞬間から始まっているということであり、かなり初期から胚は命が守られるべき生物だということである。この見解は、外科医のハサン・ハトフト（Hassan Hathout, 2009年没）（医学倫理学者、南カリフォルニアのイスラーム共同体の指導者でもあった）によって支持されており、法学者たちに妊娠初期の中絶および余剰胚の破壊に関する法的・倫理的議論を引き起こした。多くの法学者は、命の始まりは妊娠した瞬間であり、人間の胎児に対する侵害は非合法であるとしているが、人間の健康を改善するためには、人間は神とともに、初期胚を含む自然への介入は可能だとする。それでは受精卵が尊厳と権利を持つようになるのはいつなのか、という問いが残されているが、現代の大多数の法学者にとって、入魂によって胎児が人間になった段階である。

すべての法学派に認められる見解は以下のようなものである。1. コーランとハディースは、生物学的な胚の発達段階の後期に、人間の命が知覚されるとみなしている。2. 胎児は、知覚でき、自発的な運動ができるまでは、法的な人格とはみなされない。よって胚が子宮に着床した初期段階では、道徳的地位を持つとはみなされない。3. コーランが道徳的地位の基準（入魂の時期）を明示していないため、法学者は生物学的な人格（受精直後）と、道徳的な人格（妊娠期間の最初の三分の一の期間）を区別することになる。

イスラームにおいては、受精卵の破壊が人間の健康を改善するという目的のために行われる限り、ES細胞研究は、生命の授与者としての神の究極的な意志

における信仰行為であるとみなされる。サチェディーナの解釈では、イスラームは胚盤胞期の受精卵については、ES 細胞研究での使用を認めている (Walters 2004, 22)。しかし、サチェディーナは受精直後から命は始まっているとする慎重な意見も付言している。このように受精卵 (ヒト胚) には人格はないとして受精卵の破壊を認めつつも、命は受精直後から始まっているとして受精卵破壊の反対者にも考慮した内容になっている。

サチェディーナは、入魂の時期を根拠に、イスラームにおいては受精卵の破壊および ES 細胞研究は許されるとしている。これは、ヒト胚研究への公的研究費の投入禁止から、樹立された ES 細胞株による研究への公的研究費の投入許可へと転換しようとしたクリントン政権の方針に沿うものである⁸。しかし、ヒト胚を破壊して ES 細胞を樹立すること自体には、アメリカ政府は研究費を支給しないとしており、その点はイスラームの立場とは異なる。サチェディーナは、命の始まりは妊娠した瞬間である (道徳的倫理的地位は持っていないが) という見解を述べることにより、ヒト胚の破壊については公的研究費を投入できないという政府の立場を補強することになったのではないだろうか。

第2章 ユダヤ教における初期胚の議論

アメリカ政府の生命倫理諮問委員会の報告書に寄稿したレポートには、先に述べたサチェディーナを含め、さまざまな宗教、宗派の聖職者および研究者10名 (イスラーム1名、ユダヤ教3名、キリスト教6名) の見解が掲載されている。第2章ではユダヤ教⁹、第3章ではキリスト教の初期胚および ES 細胞に関する見解を取り上げる¹⁰。

まず初期胚と関係の深い中絶の可否の問題に関して、ユダヤ教の権威者たちは以下の二つのグループに分けられる。(1) マイモニデス (Maimonides 1135-

⁸ このレポートが書かれたのは、クリントン政権末期、受精卵を用いた ES 細胞研究に対する公的研究費の助成を許可するか否かが問題となっていた時期である。

⁹ 島蘭進「ユダヤ教における「いのち」の解釈を教えてください」に対する回答 (<http://homepage2.nifty.com/jyuseiran/qa/qa001.html> 2011年11月26日アクセス) に、ユダヤ教の3名の見解がまとめられている。

¹⁰ ユダヤ教、キリスト教の生命倫理に関する文献については、本稿末の参考文献リストを参照。

1204) に従い、胎児はほぼ完全な人格を備え、中絶は殺人のようなものであるとする。このグループは、母親の命への危険を広くゆるやかに解釈し、中絶への障壁を下げることもある。(2) ラシ (Rashi: Rabbi Shlomo Yitzhaqi, 1040-1105) に従い、胎児の劣った地位を強調するが、無差別な中絶を避けるために中絶への障壁を上げる。両方とも、中絶は禁止されているが、殺人ではなく、母親の命を救うためならば許されることにおいて一致している (Mackler 2003, 126; Feldman 1998, 284)。

続いて、生命倫理諮問委員会の報告書にみられるユダヤ教の見解を考察したい。

(1) ラビ (ユダヤ教聖職者) のエリオット・ドルフ (Rabbi Elliot N. Dorff, University of Judaism) の見解: ユダヤ教の ES 細胞研究に関する理解は、ユダヤ法とユダヤ神学から導かれる。我々の身体は神に属し、この条件の中で、我々は自分の命と健康を保持する。ユダヤ教は、自然的・人工的手段を病気の克服のために認めている。人間は神の似姿に創造され、尊重される。我々は、謙虚に幹細胞や科学の研究の限界に挑み、世界とその保持のために働くべきである。

幹細胞は (受精卵のみならず) 中絶胎児から得られ、この細胞を EG 細胞 (胚性生殖幹細胞 Embryonic Germ Cells) という。ユダヤ教では、中絶は禁止されている。胎児は母親の太腿とみなされ¹¹、誰も切断できないが、母体が危険なときには母親の命を救うために切断できる。中絶胎児は他人の命、健康を保つために利用されてもよい。胎児は完全な一人前の人間の地位を持たない。解剖や臓器移植によって人間の身体を利用してよいなら、胎児はなおさらである。

幹細胞は精子と卵子を受精し、培養皿で培養した余剰胚からも得られる。ユダヤ法では、子宮の中にない発生学的な素材は法的地位を持たない。子宮に入れられたとしても、タルムード (モーセが伝えたと言われる口伝律法とその解説) によれば、妊娠40日までは「単なる水のような」地位である¹²。子宮外の場合、

¹¹ Babylonian Talmud, Hullin 58a (Dorff 2003, 128).

¹² タルムードによれば、妊娠40日までは水のようなものであるとされ (Babylonian Talmud, Yevamot 69b)、別のタルムードでは妊娠3カ月までとそれ以降を区別している (Babylonian Talmud, Niddah 17a)。これは入魂の時期に基づくのではなく、むしろ胎児の肉体的発達によって決まるのである。また妊娠40日までの初期の段階では、胚はまだ母親の太腿のような地位にはないので、それ以降よりも中絶の許可の程度が大きくなる。(Dorff 2003, 128)。

人間に育つ可能性はない。

テクノロジーそのものは道徳的に中立であり、リスクー利益分析が問題になる。人々の健康は共同体の責任であり、政府は安価にそれを人々に与え、民間会社は利益を生み出す権利がある。また（優生学的な）向上のためではなく、治療のために幹細胞研究を進めるべきである。

(2) ラビのモシェ・ドヴィド・テンドラー (Rabbi Moshe Dovid Tendler, Yeshiva University) の見解：胚の道徳的地位について、胚盤胞は、妊娠14日後に140の細胞になる。ユダヤ・聖書的伝統では、妊娠40日より前の胚に道徳的地位は与えられないので、その破壊は精子の浪費ということになる。着床後40日後、胚は人間性を持つとされ、その破壊は殺人となる。接合子 (zygote) から人間性が始まるという前提は聖書にはない。

EG細胞とは8週間目の中絶胎児から取られたものである。律法では、8週間目の胎児の破壊は殺人であるが、母体を救うためにのみ許される。その胎児は研究のために利用してよい。マイモニデスによれば、律法では馬とロバの交配は禁止されているが、法を超えても、交配の結果のラバは有益である。

ユダヤ教の伝統は、聖書による中絶の禁止を守るために防護壁を建てるというバチカンとキリスト教原理主義者たちの信条を尊重するが、病気の治療を妨げる防護壁を建てることはできない。利益のほうが損失より大きいからである。また経済的報酬はドナーではなく、有能な研究者に与えられるべきである。

(3) ローリー・ゾロス (Laurie Zoloth, San Francisco State University) の見解：旧約聖書（ヘブライ語聖書）¹³の出エジプト記21章22節によれば、「人々がけんかをして、妊娠している女を打ち、流産させた場合は、もし（彼女に）その他の損傷がなくても、その女の主人が要求する賠償を支払わねばならない。仲裁者の裁定に従ってそれを支払わねばならない。もし、その他の損傷があるなら

¹³ 旧約聖書には、直接的に中絶の問題を議論していないが、出エジプト記21章22節やエレミア書1章5節「わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた。母の胎から生まれる前にわたしはあなたを聖別し諸国民の預言者として立てた」に依拠して議論される (Mackler 2003, 121)。

ば、命には命をもって償わなければならない。¹⁴」またタルムードによれば、妊娠40日より前なら、胚は水のようなものである。このように40日より前の胚の利用は許される¹⁵。

以上の議論をまとめたい。まず中絶胎児から得られるEG細胞については、中絶の問題と関連する。出エジプト記21章22節とタルムードを根拠に、胚は妊娠40日目までは人間としての地位を持たないが、40日目以降、胚は人間性を持つとされ、その破壊は殺人となる。また妊娠8週間目から人間としての地位を持つようになり、それ以降の破壊は殺人となるが、母体の健康を守るためならそれ以降でも中絶は許される。よってEG細胞は研究に利用できる。また受精した余剰胚を破壊して得られるES細胞についても、出エジプト記21章22節とタルムードに依拠して、胚は妊娠40日目までは水のようなものであり、法的地位を持たない。従って、40日までの胚から得られるES細胞は幹細胞研究に利用できる。

概してユダヤ教は、旧約聖書とタルムードに基づいて、生まれる前の胎児は一人前の人間ではないとし、また40日目までは水のようなものであり、40日目以降に人間性を持つとして、初期胚の破壊を認めている。また病人を救う利益のほうが初期胚の破壊の損失より大きいとして、胚や胎児から作られたES細胞の研究への利用も認めている。ユダヤ教は、ES細胞の樹立と研究を認め、聖典に依拠して（入魂の時期とはしていないが）初期胚が人間とみなされるおおよ

¹⁴ ユダヤ教では、カトリックのようにすべての中絶を殺人とはみなしていない。というのは、聖書的、ラビ的な文献は、妊娠の発展段階を認めているからである。もし妊婦が流産しても胎児の価値は賠償金によって支払われるべきである。胎児は一人前の人間としてはみなされず、むしろその一部とみなされる (Dorff 2003, 128)。胎児は一人前の人間とは言えないので、同害報復ではなく賠償金で済むということである。

¹⁵ 最初の二人のラビは研究推進派であるが、ゾロスは以下のような見解を述べており慎重な態度をとっている。現在の科学技術の進歩はこれまでの人知の範囲をはるかに超える領域に達しており、人間はまったく新しい倫理的チャレンジに直面している。したがって、これまで妥当とされてきたような倫理的合意の単純な適用では答えを出すことはできない。今行われている「人の萌芽」を利用する研究が、どのような倫理的含意をもつか、ユダヤ教やユダヤ思想の伝統に照らしつつ、総合的に考え、討議して対応していくべきである。単に、「いつから人は始まるか」といった問いで解決できるような問題ではなく、新しい知識や技術によって生命理解、人間理解にどのような変化が生じつつあるのか、新しい研究によってどのような社会的波及効果が生じるのか等々、多くの未知の問題に取り組んで、初めてその意味が明らかになる事柄なのである (<http://homepage2.nifty.com/jyuseiran/qa/qa001.html>/ 本稿の脚注9参照)。

その時期を定めている点、また利益と損失を比較して病気の治療を優先する点がイスラームと共通している。

第3章 キリスト教における初期胚の議論

キリスト教（カトリック）では、新約聖書の「マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった（ルカによる福音書1章41節）」、「……胎内の子は喜んでおどりました（同44節）」などに基づき、出生前の胎児の地位がより強調されている。しかし、新約聖書は中絶について明確には述べていない。神が創造したものの破壊であるとして、中絶の明確な非難が見られるのは、1世紀の『十二使徒の教訓』（ディダケー）における「あなたは中絶（phthora）によって子供を殺してはならない（Didache 2.2）」¹⁶である。またアウグスティヌスといった教父もすべての中絶を非難し、胎児が形成された後の中絶は殺人であり、殺人と同様に禁止されるとしている。中世の教会では、身体が形成され入魂が起こる時期——普通は妊娠40日目と理解された——よりも後の中絶は殺人と同じであると考えられた。17世紀の初めになると、妊娠3日目に胚は靈魂を受け取るとされたり、受精と同時であるとされたりした。19世紀には母親の命を救うための中絶は許可されるという議論もあったが、1869年、ピウス9世の勅書は、胎児は受精後ただちに人間になるとして、中絶を殺人と見なした。1885～95年、バチカンはずべての中絶を禁止する一連の教令を發布し、1965年の第2バチカン公会議でも、命は受精した瞬間から守られるべきであり、中絶は犯罪であるとして非難された（Mackler 2003, 121–124）¹⁷。1968年にはパウロ6

¹⁶ 堕胎をしてはならない。荒井ほか（訳）2009, 29.

¹⁷ 中絶に関して古いところでは、西暦1世紀末に書かれたといわれている「十二使徒の教訓」すでに「胎児や幼児を殺すなかれ」と書かれている（佐藤清太郎訳、中央出版社、1965年、11頁）。以来、教会は常に中絶を断罪してきたが、比較的最近のもので、第2バチカン公会議では次のように言われている。「あらゆる種類の殺人、集団殺害、堕胎、安楽死、自殺などすべて生命そのものに反すること……はまことに恥すべきことである。」（『現代世界憲章』27番）「堕胎と幼児殺害は恐るべき犯罪である。」（同51番）また、バチカンの教理省は1974年に「堕胎に関する宣言書」を発表して、信仰・理性の両面からこの問題に光を当てている（邦訳『堕胎に関する教理聖省の宣言』カトリック中央協議会、1975年）。そして1995年に発表されたヨハネ・パウロ2世の回勅『いのちの福音』では、多くの頁が中絶の問題に当てられている（松本 1998, 70）。なおこの回勅の翻訳は、ヨハネ・パウロ2世 2008参照。

世が回勅『フマーネ・ヴィテ (Humane Vitae——人間の生命)』で生命の尊重と人工的な産児制限への反対を表明した。

続いて、生命倫理諮問委員会報告書におけるキリスト教諸派の見解を紹介したい。

(1) プロテスタントのキリスト合同教会 (The United Church of Christ)¹⁸のロナルド・コール・ターナー (Ronald Cole-Turner, M. Div., Ph. D. Pittsburgh Theological Seminary) の見解: キリスト合同教会は、胚の地位について公的な立場はとっていない。胚を人格とみなすとは公式に宣言していないが、胚を人格とみなすことを認めている人もいる。しかし大多数は、胚は重要であるが、地位は劣っているとして、人格を認めていない。政府の基金で幹細胞研究を進めるべきである。

(2) ギリシア正教会のデメトリオス・デモプロス (Father Demetrios Demopoulos, Ph.D. Holy Trinity Greek Orthodox Church) の見解: ギリシア正教会は、苦痛を減らすための医療技術を奨励してきた長い伝統がある。受精卵は成人と発展段階は異なるが、潜在的な人格である。結論として、正統的キリスト教は人間の生命の全発展段階での神聖性を認める。どんなに高貴な目的のためでも、実験のために胚は使われるべきではない。しかし臓器移植は多くの正統派が認めているし、流産した胎児の胚からとった細胞は受け入れられる。人間の命を犠牲にしない治療上の進歩を促進すべきである。胎児も成人も殺されてはならない。人間の命は、受精卵から肉体的死までである。

(3) カトリックのマーガレット・ファーリー (Margaret A. Farley, Ph.D. Yale University)¹⁹の見解: カトリックの中にも、胚や胎児利用の研究には、意見の不一致がある。胚の道德的地位や中絶胎児の利用について反対意見と賛成意見がある。

(4) プロテスタントのギルバート・メイレンダー Jr. (Gilbert C. Meilaender, Jr., Ph.D. Valparaiso University) の見解: 20世紀の神学者のカール・バルトいわ

¹⁸ 公民権、同性愛者や女性の権利、中絶の権利といった問題にリベラルな立場をとる教会である。

¹⁹ 中絶を認めるフェミニストのシスターである。

く、弱い構成員を支えられなければ、家族であれ村であれ国家であれ、共同体は真に強いとは言えない。(すでに樹立された) ES 細胞による研究基金と胚から ES 細胞を得るための基金を詭弁的に区別してはいけない。(通常の受精胚ではなく) 不妊治療の余剰胚のみを使っていると考えることで自分を欺いてはならない²⁰。また単に胚と言うべきで、初期胚あるいは着床前の胚と言ってはならない。

(5) カトリックのエドムンド・ペレグリーノ (Edmund D. Pellegrino, M. D. Georgetown University) の見解: ローマ・カトリックの信徒たちは、人間の命は妊娠した瞬間から守られるという道徳的主張を信じている。人間の命は、一つの細胞の段階から死ぬまでの連続体であり、すべての段階で威厳を持ち、守られるべきである。不妊治療のための余剰胚をなぜ使ってはいけないのか、ほとんどは冷凍され破壊されるのではない、という反論に対する答えは、胚の運命は変わらない、親が同意したとしても、胚の固有の道徳的地位は変わらないということである。

(6) カトリックのケヴィン・ワイルズ (Kevin Wm. Wildes, S. J., Ph. D. Georgetown University) の見解: アメリカのカトリック司祭は、胚の破壊につながるので、ES 細胞研究には反対しており、胚を人間として扱うべきだとしている。余剰胚であろうと研究のために作られた胚であろうと、胚を利用する研究を道徳的に封印するべきである。

以上のように6名のうち、1名のプロテスタントのリベラル派は、胚には人格は認められないとして ES 細胞研究推進に積極的であり、1名のカトリックのフェミニストは賛否両論あるという立場である。しかし、4名(カトリック、ギリシア正教会、プロテスタント)は妊娠した瞬間から胚は人格を持つとして反対の立場をとっている。中絶を認めるリベラル派の見解もあり、さらに詳細な検討が必要であるが、大まかに言えばキリスト教は、中絶が許される時期につ

²⁰ 余剰胚も受精胚であることには変わりはない。生殖医療においては余剰胚と通常の受精胚は区別されるが、倫理的な位置づけという観点からすれば、通常の受精胚も余剰胚も同等である。これは死刑を宣告された人とそうでない人が、「人」としては存在の等しい尊厳を持つことと同じであり、中絶される胎児を実験目的で使うことができないように、死刑囚の身体を実験目的で使うことも許されないのと同じである (島蘭 2006, 33)。

いて新約聖書にはっきりした根拠がないため、『十二使徒の教訓』、初期教父、中世の神学者、そしてローマ法王の回勅などを通して、次第に最も弱い存在である受精卵の段階で人格を認めるようになった。そして現在、ES細胞の樹立およびその研究にはおおむね反対の立場であると言える。

さらにこの報告書と関連して、アメリカ政府のES細胞研究への政策という点で政治的な視点から見ると、アメリカのキリスト教の場合、中絶に反対する宗教右派²¹が自分たちの意見を反映させるために積極的に政治に働きかけ、実際に政治に影響を与えていることが特徴であろう²²。中絶反対のプロライフか中絶容認のプロチョイスか、という点が大統領選挙の争点のひとつになるほどである。キリスト教の初期胚の議論は、中絶問題と関係するため、政治にも大き

²¹ 宗教右派についてはさまざまな文献があるが、最近のものとして小川 2003; 河野 2006; 藤本 2009など参照。

²² たとえば、ES細胞研究への公的資金の投入をめぐる大統領たちの態度を見てみよう。アメリカでは、ヒト胚研究への公的研究費の支給は1996年に施行された連邦政府の法律（ディッキー修正と呼ばれる付帯条項）で禁止され、毎年更新されてきた。（ただしヒト胚研究自体は違法ではなく、民間基金等の私的研究費による研究は可能である。）この禁止令により、米国の基礎科学研究に前例のない空白が生まれ、生殖補助による不妊治療の基盤としてだけでなく、胚性幹細胞の研究にも影響を及ぼしている。この法規制の背景には米国人の多くが、生命は受精の瞬間に始まり、受精卵を用いた研究は早期中絶に当たるという考えを持っていることがあげられる（キースリング 2007, 255）。

1998年にヒト胚からES細胞が樹立されると、1999年、保健・社会福祉省は、ES細胞はヒト胚由来であっても胚そのものではないとして、ES細胞研究自体への連邦からの助成金はディッキー修正の適用外とした。ただし、ES細胞の樹立に対する援助は、胚を壊すことから助成は不可能とした。それを受けて、国立衛生研究所は、ヒトES細胞研究に対する助成についてのガイドラインの素案を1999年12月に作成し、最終案を2000年8月に連邦官報に掲載した。それによると、ヒトES細胞研究に対する国立衛生研究所の助成を認め、研究対象を余剰胚から取り出したES細胞に限定した。中絶反対者の団体等からのガイドラインに対する反対が予想されたが、クリントン大統領はガイドラインを支持する声明を出した。しかし、ガイドラインに基づく助成の審査が始まったところで、政権はブッシュ大統領に替わり、国立衛生研究所による審査は棚上げになった（井樋 2005, 134-135）。

ブッシュ政権（2001年1月～2009年1月）においては、クリントン政権時代よりも制限がかなり、2001年8月9日現在、既に存在しているES細胞株による研究には、政府の公的研究費の投入は許可されたが、新しく胚を破壊してES細胞を作成する研究への投入は禁止された。世界の研究に遅れをとるという懸念から促進案がアメリカ議会でたびたび議決されたが、ブッシュ大統領は拒否権を発動してきた。しかしオバマ大統領は、2009年3月9日、ES細胞研究に政府が助成する大統領令に署名し、新しく作った胚から樹立されたES細胞研究にも公的資金の投入が許可された（<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/16960.html> 2010年7月17日アクセス。NHK時論公論、谷田部雅嗣「先端医療研究とオバマ政権」2009年3月12日放送のウェブ版。2011年11月26日現在、アクセスできず）。

な影響力を政治にも及ぼしている点でイスラームやユダヤ教とは異なっていると言えよう。アメリカのイスラーム教徒とユダヤ教徒においては、中絶や初期胚の破壊といった問題が政治の重要な争点となることはあまりない。

結論

以上のアメリカ政府生命倫理諮問委員会の報告書に見られるイスラーム、ユダヤ教、キリスト教における ES 細胞に関する見解をまとめ、比較したい。ES 細胞の作成で議論されるのは、初期胚（受精卵）はいつから人間になるのか、という問題である。まずイスラームにおいて、この問題はすでに中絶の問題でイスラーム法学者によって議論されている。賛否両論があるが、多数の意見では、靈魂が吹きこまれる120日（40日、80日という見解もある²³）までなら胎児は人間とはみなされないの、やむをえない理由がある場合は中絶が認められている。ES 細胞の議論においても、中絶と同様に入魂に関するコーランおよびハディースが持ち出され、大多数の見解では、再生医療に使用するためならば、受精卵を破壊し、ES 細胞研究を行うことは許可されるという結論に至っている。

サチェディーナは、コーラン、ハディースを引用しつつ、ヒト胚の破壊を伴う ES 細胞作成について認めている。しかしながら同時に慎重な意見を付言しており、受精卵の破壊は認めないが、ES 細胞研究自体への公的研究費投入は許可しようと方針転換している米国政府に配慮したのではないだろうか。概してイスラームにおいては、120日以前の初期胚の利用は許されていると言えよう。

ユダヤ教においても、旧約聖書やタルムードに基づき、受精卵はいつから人間になるのかという問題が論じられている。そして妊娠40日までは胎児は水のような存在であり、人格を持たないと考えられるため、ES 細胞研究への利用は許されるという見解が一般的である。しかしながら、初期胚の利用は単に「いつから人は始まるか」といった問いで解決できるような問題ではなく、多くの

²³ スンナ派四大法学派のひとつマーリク学派は、中絶には反対という立場であり、受精直後に魂が吹き込まれると考えているのだろう。

未知の問題に取り組んで、初めてその意味が明らかになる事柄なのだとするゾロスの見解のように、初期胚利用を認めつつも、慎重な立場も見られた。

キリスト教においては、新約聖書では中絶について直接言及していない。しかし、『十二使徒の教訓』における胎児を殺してはならないという文言、および各時代の教父や神学者、ローマ法王の見解に基づき、リベラル派を除き、概して受精した時から初期胚は人格を持つという立場から、初期胚の破壊には反対の立場が多い。

三大一神教の立場を検討してきた結果、大まかに言えば、イスラームはユダヤ教との類似点が多かった。イスラームとユダヤ教は、聖典（それぞれ、コーランとハディース、旧約聖書とタルムード）に基づき、初期胚はまだ人格を持たないという立場である。よって ES 細胞研究のために初期胚を破壊することを許しており、受精直後から人格を持つという意見は少数派である。一方、キリスト教では新約聖書に明確な記述がなく、カトリック、プロテスタントを問わず、初期胚の破壊について反対の立場が多い。さらに公的資金の投入の可否といった政治政策に積極的に働きかけている点で、アメリカ社会に大きな影響力を持つ点が特徴であろう。

以上、アメリカ政府生命倫理諮問委員会の報告書に見られる三大一神教の ES 細胞研究への見解を中心に分析し、イスラームとユダヤ教の類似およびキリスト教との相違を明らかにした。イスラームのみならず、ユダヤ教、キリスト教の生命倫理（初期胚や受精卵の問題だけではなく）に関連するより多くの文献を検討し、古典文献にも目を配りつつ、現代の政治にも視野を広げた研究が今後の課題である。

* 本稿は、平成21～23年度科学研究費補助金（若手研究（B））課題番号 21720022および平成23年度新潟大学プロジェクト推進経費（奨励研究）による研究成果の一部である。

参考文献

日本語文献

- 青柳かおる 2003.「現代に生きるイスラームの婚姻論 —— ガザーリーの「婚姻作法の書」訳注・解説」*Studia Culturae Islamicae* no. 32, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 青柳かおる 2005.「ガザーリーの婚姻論 —— スーフィズムの視点から」『オリエント』第47巻第2号, 120-135.
- 青柳かおる 2008.「古典時代と現代におけるイスラームの婚姻論比較研究 —— ガザーリーとカラダーウィー」『史潮』第62号, 23-40.
- 青柳かおる 2010.「イスラームの婚姻論比較研究 —— ガザーリー, イブン・アラビー, カラダーウィー」『東洋学研究』第49巻第2号, 105-121頁.
- 青柳かおる 2011.「イスラームの生命倫理における胚の形成過程の問題」『比較宗教思想研究』第11輯, 1-16頁.
- 荒井献ほか(訳) 1998.「使徒教父文書」講談社, 講談社文芸文庫.
- 飯塚正人 2003.「解題 現代イスラーム世界における人口爆発とガザーリーの遺産」青柳 2003, 152- 160.
- 井樋三枝子 2005.「胚性幹細胞 (ES 細胞) 研究助成金緩和法案の審議」『外国の立法』第226号, 133-146 (<http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/legis/226/022606.pdf> 2011年11月26日アクセス).
- 小川忠 2003.「原理主義とは何か —— アメリカ, 中東から日本まで」講談社現代新書.
- キースリング, アン A., スコット C.アンダーソン (須田年生監訳) 2007.「幹細胞の基礎からわかるヒト ES 細胞」メディカル・サイエンス・インターナショナル.
- 河野博子 2006.「アメリカの原理主義」集英社, 集英社新書.
- サチエディーナ, アブドゥルアズィーズ (青柳かおる訳) 2007.「イスラームにおける生命倫理」『生命倫理百科事典』丸善, 第1巻, 57-65.
- 島齒進 2006.「いのちの始まりの生命倫理 —— 受精卵・クローン胚の作成・利用は認められるか」春秋社.
- 新共同訳 1988.「聖書 旧約聖書続編つき」日本聖書協会.
- 中田考 2005.「「イスラーム」と「生命倫理」」小松美彦・土井健司編『宗教と生命倫理』ナカニシヤ出版, 149-180.
- 西川伸一 2008.「イラン医学見聞記 —— 生殖医療・幹細胞研究・移植医療が進む宗

教国」『科学』岩波書店, 第78号第 12巻, 1363-1368.

藤本勝次・伴康哉・池田修 (訳) 1979.『コーラン』中央公論社.

藤本龍児 2009.『アメリカの公共宗教 —— 多元社会における精神性』NTT 出版.

ブハーリー (牧野信也訳) 1993-1994.『ハディース —— イスラーム伝承集成』(上・中・下) 中央公論社.

松本信愛 1998.『いのちの福音と教育 —— キリスト教的生命倫理のヒント』サンパウロ.

ムスリム (磯崎定基・飯森嘉助・小笠原良治訳) 1987.『日訳サヒーフ・ムスリム』日本ムスリム協会.

ヨハネ・パウロ二世 (裏辻洋二訳) 2008.『回勅 いのちの福音』カトリック中央協議会, ペトロ文庫.

外国語文献

イスラームの生命倫理

Aoyagi, K. 2005. "Al-Ghazālī and Marriage from the Viewpoint of Sufism," *Orient: Reports of the Society for Near Eastern Studies in Japan*, 40, 124-139.

Aoyagi, K. 2011. "A Comparative Study of Marriage in Islamic Thought: Al-Ghazālī and al-Qaraḍāwī," T. Kurihara ed., *Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte*, Niigata: Niigata University, 29-53.

Atighetchi, Dariusch 2007. *Islamic Bioethics: Problems and Perspectives*, [Dordrecht]: Springer.

Bowen, Donna Lee 1997. "Islam, Abortion, and the 1994 Cairo Population Conference," *International Journal of Middle East Studies*, Vol. 29, No. 2, 161-184.

Brockopp, Jonathan E. (ed.) 2003. *Islamic Ethics of Life: Abortion, War, and Euthanasia*, Columbia, S.C.: University of South Carolina Press.

Brockopp, Jonathan E. 2008. "Islamic and Bioethics: Beyond Abortion and Euthanasia," *Journal of Religious Ethics*, Vol. 36, No. 1, 3-12.

Brockopp, Jonathan E. and Thomas Eich (ed.) 2008. *Muslim Medical Ethics: From Theory to Practice*, Columbia, S.C.: University of South Carolina Press.

Dunstan, G..R. 1990. *The Human Embryo: Aristotle and the Arabic and European Traditions*, Exeter: University of Exeter Press.

Eich, Thomas 2008. "Decision-Making Processes among Contemporary 'Ulama': Islamic Embryology and the Discussion of Frozen Embryos," in Brockopp 2008, 31-77.

- Ghanem, Isam 1982. *Islamic Medical Jurisprudence*, London: Arthur Probsthain.
- Hamdy, Sherine, 2008. "Rethinking Islamic Legal Ethics in Egypt's Organ Transplant Debate," in Brockopp and Eich 2003, 78-93.
- Hammad, Ahmad Zaki (translation review) 1999. *The Lawful and the Prohibited in Islam*, Plainfield, Indiana: American Trust Publications.
- Haque, Omar Sultan 2008. "Brain Death and Its Entanglements," *Journal of Religious Ethics*, Vol. 36, No. 1, 13-36.
- Katz, M.H. 2003. "The Problem of Abortion in Classical Sunni *fiqh*," in Brockopp 2003, 25-50.
- Khan, Faiz 2008. "An Islamic Appraisal of Minding the Gap," *Journal of Religious Ethics*, Vol. 36, No. 1, 77-96.
- Khan, M.E. 1975. "Is Islam against Family Planning?," *Islam and the Modern Age*, Vol. 6, No. 2, 61-72.
- Krawietz, Birgit 1997. "*Ḍarūra* in Modern Islamic Law: The Case of Organ Transplantation," in R. Gleave and E. Kermeli ed., *Islamic Law: Theory and Practice*, London: I. B. Tauris, 185-193.
- Masoodi, Saqlain and Lalita Dhar 1995-96. "Euthanasia at Western and Islamic Legal Systems," *Islamic and Comparative Law Review*, Vol. 15-16, 1-36.
- Moazam, Farhat 2006. *Bioethics and Organ Transplantation in a Muslim Society: A Study in Culture, Ethnography, and Religion*, Bloomington: Indiana University Press.
- Musallam, B.F. 1983. *Sex and Society in Islam: Birth Control before the Nineteenth Century*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Omran, Abdel Rahim 1992. *Family Planning in the Legacy of Islam*, London: Routledge.
- Rispler-Chaim, Vardit 1993. *Islamic Medical Ethics in the Twentieth Century*, Leiden: E.J. Brill.
- Rispler-Chaim, Vardit 1999. "The Right Not to Be Born: Abortion of the Disadvantaged Fetus in Contemporary Fatwas," *Muslim World*, Vol. 89, Issue 2, 130-143.
- Rispler-Chaim, Vardit 2008. "Contemporary Muftis between Bioethics and Social Reality," *Journal of Religious Ethics*, Vol. 36, No. 1, 53-76.
- Rogers, Theresa 1999. "The Islamic Ethics of Abortion in the Traditional Islamic Sources," *Muslim World*, Vol. 89, Issue 2, 122-129.
- Sachedina, Abdul Aziz 1980. *Islamic Messianism: The Idea of the Mahdi in Twelver Shi'ism*, State University of New York, Albany.

- Sachedina, Abdul Aziz 1988. *The Just Ruler in Twelver Shi'ism: The Comprehensive Authority of the Jurist in Imamite Jurisprudence*, New York: Oxford University Press.
- Sachedina, Abdul Aziz 1988. "Islamic Views on Organ Transplantation," *Transplantation Proceedings*, Vol. 20, No. 1, supplement 1, 1084-1088.
- Sachedina, Abdul Aziz 2000. "Testimony of Abdulaziz Sachedina: Islamic Perspectives on Research with Human Embryonic Stem Cells," in National Bioethics Advisory Commission (USA), *Ethical Issues in Human Stem Cell Research*, Vol. 3, Rockville, Maryland, 29-33(<http://bioethics.georgetown.edu/nbac/stemcell3.pdf>, G1-G6 2011年11月26日アクセス).
- Sachedina, Abdul Aziz 2004. "Bioethics in Islam," *Encyclopedia of Bioethics*, 3rd ed., New York.
- Sachedina, Abdul Aziz 2005. "End-of-life: The Islamic View," *The Lancet*, Vol. 366, Issue 9487, 774-779.
- Sachedina, Abdul Aziz 2006. "The Cultural and the Religious in Islamic Biomedicine: The Case of Human Cloning," in Heiner Roetz ed., *Cross-cultural Issues in Bioethics: The Example of Human Cloning*, Amsterdam: Rodopi, 263-290.
- Sachedina, Abdul Aziz 2009. *Islamic Biomedical Ethics: Principles and Application*, Oxford: Oxford University Press.
- Sachedina, Abdul Aziz n.d. 1. "Right to Die?: Muslim Views About End of Life Decisions." (<http://www.people.virginia.edu/~aas/article/article3.htm> 2011年11月26日アクセス)
- Sachedina, Abdul Aziz n.d. 2. "Cloning in the Quran and Tradition." (<http://www.people.virginia.edu/~aas/article/article4.htm> 2011年11月26日アクセス)
- Sachedina, Abdul Aziz n.d. 3. "Brain Death in Islamic Jurisprudence." (<http://www.people.virginia.edu/~aas/article/article6.htm> 2011年11月26日アクセス)
- Serour, G.I. 1993. "Bioethics in Artificial Reproduction in the Muslim World," *Bioethics*, Vol. 7, No. 2-3, 207-217.
- Shahr, Sayed Sikander 1996. "Mercy Killing in Islam: Moral and Legal Issues," *Arab Law Quarterly*, Vol. 11, No. 2, 105-115.
- Walters L. 2004. "Human Embryonic Stem Cell Research: An Intercultural Perspective," *Kennedy Institute of Ethics Journal*, Vol. 14, No. 1, 3-38.
- Ziaei, S. and Farokhi M. 2004. "Ethical Challenge of Stem Cell Research and Tissue Transplantation," *Eubios Journal Asian and International Bioethics*, Vol. 14, 97-99.

ユダヤ教の生命倫理

- Cutter, William ed. 2007. *Healing and the Jewish Imagination*, Woodstock: Jewish Lights Publishing.
- Dorff, Elliot N. 2003. *Matters of Life and Death: A Jewish Approach to Modern Medical Ethics*, Philadelphia, The Jewish Publication Society (reprint of 1998).
- Dorff, Elliot N. and Louis E. Newman 1995. *Contemporary Jewish Ethics and Morality*, Oxford: Oxford University Press.
- Feldman, David M. 1998. *Birth Control in Jewish Law*, New York: New York University Press.
- Freedman, Benjamin 2008. *Duty and Healing: Foundations of a Jewish Bioethics*, New York and London: Routledge (reprint of 1999).
- Jakobovits, Immanuel 1975. *Jewish Medical Ethics*, New York: Bloch Publishing Company.
- Maier, Levi 1986. *Jewish Values in Bioethics*, New York: Human Sciences Press.
- Riemer, Jack 2002. *Jewish Insights on Death and Mourning*, Syracuse: Syracuse University Press (reprint of 1995).
- Rosner, Fred and J. David Bleich 2000. *Jewish Bioethics*, Hoboken: Ktav Publishing House.
- Sinclair, Daniel B. 2003. *Jewish Biomedical Law: Legal and Extra-legal Dimensions*, Oxford: Oxford University Press.
- Zohar, Noam J. ed. 2006. *Quality of Life in Jewish Bioethics*, Oxford: Lexington Books.

キリスト教の生命倫理

- Brakman, Sarah-vaughan and D.F. Weaver eds. 2010. *The Ethics of Embryo Adoption and the Catholic Tradition: Moral Arguments, Economic Reality and Social Analysis*, [Dordrecht]: Springer.
- Corkery Pádraig 2010. *Bioethics and the Catholic Moral Tradition*, Dublin: Veritas Book.
- Fisher, Anthony 2011. *Catholic Bioethics for a New Millennium*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hui, Edwin C. 2002. *At the Beginning of Life: Dilemmas in Theological Bioethics*, Downers Grove: Inter Varsity Press.
- Kane, Brian M. 2011. *The Blessing of Life: An Introduction to Catholic Bioethics*, Lexington, Mass.: Lexington Books.
- May, William E. 2008. *Catholic Bioethics and the Gift of Human Life*, Huntington, Indiana: Our Sunday Visitor.

- Pellegrino, Edmund et al. eds. 2009. *Human Dignity and Bioethics*, Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press.
- Scarnecchia, D. Brian 2010. *Bioethics, Law, and Human Life Issues: A Catholic Perspective on Marriage, Family, Contraception, Abortion, Reproductive Technology, and Death and Dying*, Lanham, The Scarecrow Press Inc.
- Smith, George P. 2010. *The Christian Religion and Biotechnology: A Search for Principled Decision-making*, Dordrecht: Springer.
- Walter James J. and Thomas A. Shannon eds. 2005. *Contemporary Issues in Bioethics: A Catholic Perspective*, Lanham: Rowan and Littlefield Publishers Inc.
- Wildes, Kevin Wm. S.J. 2000. *Moral Acquaintances: Methodology in Bioethics*, Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press.
- Wildes, Kevin Wm. S.J. and Alan C. Mitchell ed. 1997. *Choosing Life: A Dialogue on Evangelium Vitae*, Washington, D.C.: Georgetown University Press.

ユダヤ教とキリスト教の生命倫理

- Mackler, Aaron L. 2003. *Introduction to Jewish and Catholic Bioethics: A Comparative Analysis*, Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Pellegrino, Edmund D. and Alan I. Faden 2001. *Jewish and Catholic Bioethics: An Ecumenical Dialogue*, Washington, D.C.: Georgetown University Press.

複数の宗教における生命倫理

- National Bioethics Advisory Commission 2000. *Ethical Issues in Human Stem Cell Research*, Vol. 3, Religious Perspective, Rockville, Maryland (<http://bioethics.georgetown.edu/nbac/stemcell3.pdf>).
- Peppin, John F., Mark J. Cherry and Ana Iltis eds. 2009. *The Annals of Bioethics: Religious Perspectives in Bioethics*, London and New York: Taylor and Francis.